

高比重液による脊椎麻酔の先駆者

朴蘭秀の生涯

松 木 明 知

演者は、先に日本麻酔科学史資料(四)として日本の脊椎麻酔、硬膜外麻酔の歴史について、北川乙治郎、諸橋鉄弥、朴蘭秀などの業績を取り上げ、その代表的な論文を復刻した。

現在日本では、高比重液ペルカミンS、ネオペルカミンSを用いた脊椎麻酔が広く普及している。朴蘭秀がこの方法を開発し、日本外科学会で発表したのが、昭和十五年(一九四〇)であるから、以来五十年経過している。

五十年前に開発された医療が、現在もなお医療の第一線で広く実施されている例は極めて少ない。この脊麻を開発したのは、当時名古屋大学の齋藤(眞)外科の教室員、朴

蘭秀であった。この蔭には齋藤教授が虫垂炎の手術を低比重液を用いて受けた際、麻酔のレベルが上方まで達して呼吸困難を来し、九死に一生を得たエピソードがある。このため齋藤教授はより安全な脊麻の開発を朴に命じたのである。以来、朴は懸命に努力し、遂に高張食塩水または高張ブドウ糖を用いて注入する麻酔薬を高比重とし、手術台を傾斜させて麻酔の高さを調節する脊椎麻酔法を開発した。ペルカミンS、ネオペルカミンSのエスは、spinal anesthesiaのエス、高比重を意味する schwer のエス、齋藤のエスであるという。しかし朴については、戦後間もなく死亡したという情報以外、全く不明であった。朴が名古屋大学外科出身であったことから、名古屋市立大学麻酔科の青地名誉教授も韓国麻酔科学会の方々にも依頼して調査したが、全く分からなかった。

演者が日本麻酔科学史資料(四)の編集の必要上、朴の妻がソウル市に健在であることを突き止め、直接電話で朴の生涯について尋ね、朴が昭和二十五年五月二十八日、三十七才で没したことなどが明らかとなったので報告する。

(弘前大学医学部)